

理学部魂を

高木芳弘

私は姫路工業大学理学部の第1期生が新2年生として新都市キャンパスで学び始めた平成3年4月に物質科学科に赴任しました。周囲の自然環境に良く調和した理学部のモダンな学舎と、進取の気鋭に溢れた学生諸君の若々しい姿が印象的でした。その2年後には私のいる光物性学研究室は卒業研究の学生達で一気に賑やかになりました。そうした創設期の理学部は新しい研究に力を漲らせる教員と最先端の研究を理解し自分のものにしようと励む学生の気概が相乗的に発揮された時期でした。特に1期生は見習うべき先輩もいないので、自主的に取り組む姿勢が強かったようです。

大学は教育の仕上げ段階として、社会で力を発揮できるよう必要な資質を自主的に養う場所です。そして理学部は物質や生命の仕組みを理解し、将来さらにそれを極め、あるいは社会の場で実践に移す基礎力を養う場所です。日本の教育体制の責任も感じますが、高校までの学習で考える習慣が身につけていない人も多く見受けました。何故だろうと考えることからなるほどと得心するまで粘ればその先が開けてきます。実社会にあっても然りです。理解しないままで留まるより間違っても自分なりに納得した理解が出来る方がずっと将来につながると思います。今だから言えますが、期末試験では、不正解でも一見理屈が通っていて何処に誤りがあるのか採点に苦勞する答案に時々出会いました。これはある意味私の努力に報いてくれているので大いに評価をしました。振り返ると学生諸君と接した20年間は皆さんにこの“理学部魂”を植え付けるための歳月であったような気がします。そして時々開かれる研究室のOB会で感じることは、就職の際に不安だった卒業生が数年後には頼もしい社会人に成長していることです。実社会で日々取り組む課題は専門的な限られた分野であるかも知れませんが、その自信に満ちた姿はもちろん社会人において獲得したものであっても、その奥に大学で培われた理学部魂が息衝いていると喜んでいきます。

40代を迎えた1期生諸君を筆頭に、30代、20代、そして新卒の皆さん、それぞれの節目に当たり勇躍壮途、新たな気概に満ちていることと思います。それぞれの分野で学び方も理解の仕方も様々と思いますが、独断に陥らぬよう周りの考え方も尊重しながら、理学部魂を是非形あるものに具現して下さい。